

平成 29 年度横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会
分科会2「支援を必要とする人(社会的孤立など)に気づき、支える仕組み」
第2回

日 時	日時：平成 29 年 7 月 24 日（月）13 時 30 分～15 時 30 分
開催場所	横浜市庁舎 7 階 7S 会議室
出席者	青木委員、内海委員、坂田委員、下嶋委員、田高委員、西尾委員、山田委員、米岡委員、伊藤委員（臨時委員） （9 名）
欠席者	赤羽委員、川畑委員
オブザーバー	旭区生活支援課、西区福祉保健課、教育委員会事務局学校支援・地域連携課、健康福祉局障害福祉課、健康福祉局生活支援課、健康福祉局地域支援課、こども青少年局企画調整課、こども青少年局青少年育成課、市民局地域活動推進課
事務局	健康福祉局福祉保健課
開催形式	公開（傍聴者 0 名）
議 題	<p>【議事 1】 第 4 期横浜市地域福祉保健計画と成年後見制度利用促進計画の一体的策定にかかる分科会の設置について</p> <p>【議事 2】 第 1 回分科会 1・2 の振り返り</p> <p>【議事 3】 事例を通じた意見交換</p> <p>（1） 事例 1 「障害の娘と高齢の親」</p> <p>（2） 事例 2 「堆積物であふれた家に一人暮らしする高齢者」</p> <p>（3） まとめ</p> <p>【議事 4】 第 3 回分科会に向けて</p>
議 事	<p>開会</p> <p>1 第 4 期横浜市地域福祉保健計画と成年後見制度利用促進計画の一体的策定にかかる分科会の設置について</p> <p>（西尾分科会長）</p> <p>分科会としては 2 回目、前は、6 月 17 日で今回は 7 月 24 日である。今日は、事例を通じた意見交換を行うが、先ず、最初の議題として、全体の検討会で説明があった「第 4 期地域福祉保健計画と成年後見制度利用促進計画の一体的作成に係る分科会の設置について」と挙げられているので、ご説明をお願いします。</p> <p>・事務局より資料 1 について説明（説明省略）</p> <p>（西尾分科会長） ご説明いただいたように、権利擁護をテーマに第 3 分科会を設置したいということ。何かご質問等あるか。それぞれの分科会で承認をいただきたいとのことだが、ご承認いただくことでよろしいか。</p> <p>（一同） 了承</p> <p>（西尾分科会長） 委員構成について、策定・推進委員に個別調整があった場合は協力をお願いしたい。</p> <p>2 第 1 回分科会 1・2 の振り返り</p>

・事務局より資料2について説明

(事務局) 分科会2で差し替えの部分について(資料2-3差替)、図式の中のBの枠、15歳以上～ということで、法的サービスを利用する前までの年齢74歳までの方、特に男性は地域となかなかつながりが持ちにくいということで、こちらを修正している。また、Dの枠の中程、「DV被害にあった母」と前回の資料にはあったが、検討会の意見もいただきデートDVも含むということで母だけとは限らないので、「DV被害者」に変更させていただいている。また、前回は伝えたが、こういった方達については、相談につながった場合はDには入るが、なかなか窓口の相談につながりにくい部分としては、Aに入っている方が多いのではないかとということで流動的なものと考えている。あとは、ご本人様の困り感、SOSの発信の仕方によってもそれぞれ場所が変わってくるということだったが、前回の意見も含め、本人だけでなく家族全体の捉え方も一つあると言われていたので、「世帯全体で複合的な課題がある」場合もかなり多くなってきているので、それぞれAからBCDに入っているような複合的なものも入ると思う。

特にAのところにいる方に関しては、元々、地域との接点がないと埋もれやすいということもあるので、前回の話合いの中では、元気なうちにいろいろなところとつながっていく必要があるのではないかと意見が出ていた。

また、これまで分科会2のテーマは、「支援を必要とする人に気付いて支える仕組み」であるが、これまで検討する際、「地域で困り事を抱えている人」と表現していたが、「支援を必要とする時期よりも状況が深刻化する前の何らかの予兆の部分がある段階から早い時期に地域で気付いて支えることが重要な支援」ということで、「支援を必要としている人」だけでなく「その段階まで行かない人」まで含めて検討するために「地域で困りごとを抱えている人」というような表現をさせていただいている。引き続きこの観点で検討いただけたらと思う。

(西尾分科会長) 振り返りについて、資料の修正点を中心に説明いただいたが、意見、質問等あればお願いします。この後、意見交換の中で十分、ご意見を伺いたいと思うので、確認ということでよろしいか。

(一同) 了承

(3) 事例を通じた意見交換(資料3)

(西尾分科会長) それでは、議事3に入る。事例は、二つ用意いただいた。事例の検討そのものというより、地域で困りごとを抱えている方の見えにくい部分をどのように受け止めて支援につなげていけばよいのかについてご意見をいただきたい。

最初に、事務局より進め方のご説明をいただき、それから事例1・2と時間をかけて協議ができればと思う。

(事務局) 分科会2に関しては、主に、「支援が必要な方への支援が届く仕組み」に係る部分を中心になってくるが、これ以外に自助力を高める取組やいろいろな地域との連携強化についても係わってくる部分がある。

あとは、「地域の中で住民の方の気づきを生かす」や、先程説明したとおり、一世帯

の中でも複合的な課題がかなりあるということでは、分野や課題にとらわれない取組ということで落とし込んでいければよいと思っている。また、「住民が相談しやすい体制づくり」や「ちょっとした変化に気付けるような地域の方への意識づくり」、「事業を生かした見守り早期発見」や早いうちから地域とつながっていくというところでは、人材についての「地域住民とつながることの意識付け」にもつながってくると思う。このような話合いの中からそれぞれの骨子案を考えていくうえで基となるご意見をいただけたらと思う。

続いて、「事例を通した意見交換のやり方」について、資料3-1と3-2になるが、各事例の対象者が地域で自分らしく生活をしていくために状況が深刻化する前の早い時期に「誰が何をすることができるか」、ということでご検討いただきたい。特に、自助共助のところを中心にとということではあるが、公助につながることもあるので、この限りではない。先程、西尾分科会長に言っていたように、この事例についての検討ではなく、地域で困りごとを抱えている人に、どういった場面でどう気付いていけるかの材料として出しているの、細かい設定はしていない。事例の内容にとらわれずに自由にご意見をいただきたい。

(西尾分科会長) 今回の進め方の説明については、よろしいか。

事例を通して、それぞれ時間をかけて検討していただきたいが、この事例に限らず、なかなか潜在化して浮かび上がりにくいニーズをどうするか事務局で検討されて、前回の委員会でも地域子育て支援拠点ら虐待を疑われるケースが出てきて、虐待は見えにくい代表例と言えるかと思うが、3つ事例をあげると時間も取りにくいので、2つにした。その中で、自分の地域や自分の領域で感じられることも含めてご発言いただきたい。

【事例1】「障害の娘と高齢の親」

(西尾分科会長) それでは、事例1の50代の障害の娘さんと80代の高齢の親という8050の一つの事例で、生活困窮の相談の流れの中で把握をされてきた事例と聞いている。

(オブザーバー) (旭区生活支援課) 資料3-1について説明(説明省略)

(西尾分科会長) 資料は目を通していただいていると思うが、事例の概要とエコマップがあり、支援を必要とするご本人とご家族を中心とした社会関係を図式化してわかりやすくまとめていただいた。それでは、検討事項の再確認で読ませていただく。この世帯の人達が地域で自分らしく生活をしていくために状況が深刻化する前の早い時期で誰が何をすることができるのか、自助・共助・公助それぞれ重要になるが、特に今日は、自助・共助の部分を中心にどんなことができるのか、係わりを持たせるかを是非、いろいろな面から挙げていただきたい。最初に、話がしやすいように伊藤委員を指名させていただきたい。

(伊藤委員) 2年前に母親が負傷し父親が亡くなられたところでは、住んでいたアパートの大家さんが、家族が困っているかと気に掛ける部分があったと思う。そこから相談への促し、場合によってはサービスの利用につながっていく兆しになった可能性もある。

近隣との地域的なつながりが無いという背景の中、父親が亡くなり、例えば、葬儀等、近隣住民にも気づきのきっかけになるようなことがあり、気に留めるチャンスがあったと思われる。

ご本人である長女が通っていた作業所でも2年前のところで変化があったかもしれない。半年前に、長男が転出され、買物等、生活上の役割が担えなくなり、そこでも近隣の、場合によっては商店等で買物に来なくなった長男の変化で気づけたのではないかと。また、ごみ出し等、今まで出来ていたことができにくくなっていたり、ルール通りに行われていなかった場合、近隣の住民が声かけをできるひとつのタイミングだったかもしれない。

時系列にとらわれた話をしてしまっているが、半年前から2ヶ月前までの間に、長男がいなくなり生活支援ができなくなった時におそらく何らかの変化があっただろうと思うので、この間が大きな変化の時期だろうと思われる。買い物にいけなくなった段階が、家族が本格的に困り始めた所だと思われる。

2ヶ月前に長女が作業所を休止した時、作業所の方も長女のお宅訪問時に何かわからなかったか、お母さんの病院通いで何か把握できなかったか、近隣の方に期待する部分は大きいと近隣と結びつきが少なかったことに気がつかない原因がありそうだ。

(西尾分科会長) 本事例については、実際に区の社会福祉協議会が関わっておられる事例を側面からお話いただいたということでしょうか。

(事務局) いえ、そのようなことばかりではない。最初は、区役所の生活支援課に生活困窮ということで「年金が足りなくて」と相談がいき、そこから分かったという事例であった。少しずつ話をさせていただきながら事例像をイメージしていただければと思う。通常、エコマップでは、中心に支援を必要な方の表示をするが、この場合は、世帯として困難でおられるということなので、お母さん、娘さんの両方の視点で考えていただきたい。

(下嶋委員) この事例とは違うが、ご近所にご主人が80代、奥様が70代の老々介護夫婦の紹介をさせて下さい。80代のご主人が昼間寝て夜起きる日々です。奥様に「死にたくないよ」とか「死んだらどうなるの」とか、奥様は、一生懸命介護をしているがそのストレスで病的になってきてしまった。その後、ご主人が亡くなられてホッとされていて、むしろ重荷から解放された印象であった。その後奥様は、健康状態が良くないので病院に行ったら胃がんの初期だとわかった。在宅で奥様が一人で介護をされていたが、介護している人が非常に重篤な状態に陥る。それを近所の方が早めに気付くのが大事だと思う。自助を高めるための支援の強化、今回のケースでは老障介護で、母親が脳血管障害を発症されたら在宅で長女と一緒に暮らしたくても困難です。後遺症やリハビリの公的サービスとのリンクし自助の支援の強化を地域の方がする。それが無理だとしたら包括支援センターや担当の民生委員を通して区の窓口申請をする。平成27年の介護保険法の改正で平成28年1月から要支援1・2の方が横浜市総合事業に移った。サービス未利用というところが奇異に感じる。要支援のレベルなので、自助とサービスを利用する手助けを地域の方、知り合いの方、近隣の方がする共

助が第一だと思う。それから、父親が死亡された時、お葬式等で話の俎上に出てくるはずなので、その時に何故、脳血管障害を発症されたという事実だけで放置されたのか、長女も障害があるし、これは非常に残念である。また、このように親子で暮らしているから大丈夫だろうと思いがちで、一般的に民生委員が特に気を付けるのは、独居高齢者なので、このように親と一緒に住んでいる精神障害の方は、話をしていればわかるが、よほど刮目してみないと外見では気がつきにくい方である。長男が半年前に何もしないで転出してしまったことも残念。家族の一員として、自分はこのままでは出来るが、ここから先は出来ないので地域の方や公助でお願いします等の段取りを取らずに転出されたことが残念である。それから、お金がなくて区に相談しにいくとのことだが、お金がないということは、使い方が計画的でないとも考えられる。社会福祉協議会で権利擁護事業・日常生活支援事業を使う手立てをすとか、銀行や郵便局に行けないのなら、日常的な金銭管理をあんしんセンターに頼むとか、作業所に通えないのなら、作業所の指導員ともよく話をする。生活習慣病は、通所等で活動性を高めないと悪化する場合が多いので、作業所の生活指導員とよく話し合いをして、通所を復活する方向で考えないと益々重篤な病気になってしまう。ここでは肥満傾向と血圧上昇とのことだが、メタボになって血圧が130以上なのか、それともぎりぎりのところだったら、むしろ生活習慣を規則正しくすることで、生活習慣病も治るし、年金を計画的に扱えないのなら金銭管理をあんしんセンターに頼むとか、いろいろな方法がある。「支援を必要としない方に気づき」と気づきの部分についてはダイレクトに長女の方が区の生活支援課に相談に行かれたために、地域の方が少し後回しになっている。一般的には、地域の方が気付いて民生委員なり包括に相談に行って、最終的に区の然るべき部署に相談に行くのだが、地域が置いてきぼりになっているようで少し気になる。

ターニングポイントは、2年前に母親が脳血管障害を発症した時点、父親が死亡された時点、半年前に長男がどのような理由か、高齢の母親と精神障害疾患のある姉妹をおいて転出された時点、そして長女が作業所を休止した時点である。私達、地域の人ができるのは、自助の強化支援で、本来の、利用できる公的サービスに少しでも早くつなげられるように促すことである。

(西尾分科会長) 下嶋委員からたくさんの重要なポイントをご指摘いただいた。ひとつは、ご家族の介護意識が強いのでなかなか問題が見えにくくなっている老々介護のことを言われた。そのために自助の力を高めるにはどうしたらよいかという提起があった。それから、区役所、病院や作業所とはつながっているが、地域とのつながりはなかなか見えてこない中、その点で公的な或いは制度的なサービスにつながっていれば一定の福祉ネットワークにつながり安心があるが、そこにつなげるためにはどうしたらよいかという問題提起であった。如何でしょうか。

(坂田委員) これは、精神障害の方を家族が隠すのが一番の原因で、自分から言わないとわからない。長女が作業所を辞めた時、どのような対応をしたのか知りたい。お母様が80代で元気でいられたのに2年前に発症された時にどのような対応をされたのか、

長男の方が出て行かれたのは、この方も障害があるのかもしれない。嫌で出て行ったのかもしれない。精神障害は、とても難しく親子でも孤立してしまう。周りとの関係をみても役所だけ。地域の方は、殆どこの親子のことはわかっていないと思う。

(西尾分科会長) 制度的なサービス、例えば作業所に通えなくなった時にそれで終わりではなく、50歳の娘さんご本人だけでなく、その背景の作業所がもう少し支援に入っていたら違っていたかもしれない。

(坂田委員) 作業所は、お休みしている方は、やはり気になると思う。

(下嶋委員) 「病気を治して、作業所に通所したい」、これは困難。病気を完治させるのは難しいだろうから「病気を治しながら、作業所に通所したい」だが妥当。

(坂田委員) 慢性というのだから、精神ではなく生活習慣病の方だと思う。精神の方は治すのは難しいから。

(下嶋委員) どちらも難しいかもしれないが、生活習慣病は規則的に通所した方がいいと思う。

(山田委員) お母さんの病気が先か、お父さんが亡くなったのが先か、そこも重要かと思うが、お母さんが脳血管障害を発症した後も入院が必要だったろうし、その後の通院の時も送迎等の付き添いをお兄さんが行っていたのだとすれば、その時に入院された病院のソーシャルワーカーさんが何か兆しに気付いていたのではないかと思う。その後、リハビリも必要だと思うので、通所するなりどうしたのか不思議である。

また、お金の計画的な管理は、おそらく長男がしていたと思うが、お父様が亡くなった時に、家賃の支払いや光熱費の支払いの名義はお父様であったであろうことを誰が引き継いだかも重要なところで、大家さんもそこで気付けたかもしれないし、お母さんの病気とお父さんが亡くなったのとどちらが先かで違うが、名義の変更も恐らく長男がされたのだとすると、その時に、もう少し誰かが見ていてくれたらよかったと思う。

ごみ出しや洗濯や日々の買物を誰がしていたのかわからないが、同じ町内にいたら、明らかに洗濯物がでていないとか、ゴミ出しに誰も出て来ない様子があるとわかれば、近所の人気付いているはずだし、もともと4人の世帯だったのが2年間にふたりも減っているところは、大きな変化なので、アパートや集合住宅なら誰かが気付いていただろうと思った。

あとは、作業所に就労支援の方が入っていたのかわからないが、作業所のスタッフの方か、就労支援で長女に関わっていたスタッフが、お母さんの状況も恐らく知っていたと思うので、地域包括につないで認定をとってサービスを受けることはできたのではと思う。

(西尾分科会長) いろいろな点で公的サービスにつながってはいたが、それぞれ範囲が限定されているので、お互いに情報共有しようとするのはなかった。誰がキーになるのか、それは、公的サービス側でもそうだし、地域の側でも気があったはずだが、その存在がどうだったのか見えない。本当は、脳血管障害を発症した時点で要介護認定やサービスにつなげられるような働きができればよかったと思われる。

(下嶋委員) まずは、母親が脳血管障害を発症した時点で、病院のお医者さんの世話になっており、ソーシャルワーカーから退院の時に“要支援”レベルだと判断されたら申請した方がいいと思う。このエコマップでは、長女が◎で母が○になっているが、まず、母親の方を◎にして、これにケアマネジャーを付けると母親の病後だけでなく、長女の方にも言及していくはずである。今、サービスが入っていないのは、長女に◎がついているところに問題がある。母親の自助の支援の強化として、申請をして担当のケアマネが付くには、担当の民生委員の手助けや障害者の親の会、地域住民のボランティアとか、社会福祉協議会でやっている送迎サービスなどいろいろ使って、まず、母親が何らかのサービスを受ける可能性はあるが、長女の方は精神障害があるので見えにくい部分があり、近隣の方からするとアンタッチャブルな部分になっている。その日のうちに状態も変わるし、一人暮らしでなく、長女がいるので外見的には普通の家庭なので、近隣の方が「困ってますか」等の問いかけは難しい。

このケースの場合、困りごとを知るきっかけは、自助を高め、地域の共助との連携、それがひとつのステップになると思う。

(米岡委員) 地域の気づきの点で自分のところでやっている事例を話したい。この中で、地域がこの家庭に気付くチャンスは、母親が脳血管障害を発症した時、救急車が来たと思う。救急車がきた時点で周りが気付く。また、父さんが亡くなった時、でも最近家族葬も多く、隣のお兄さんの家にも知らせないというケースもあるぐらいだが、実は、私は、近所でどなたかお亡くなりになると、お香典を持って伺っている。以前は、一人で行っていたが、民生委員とシニア会の会長さんの都合がつくようなら一緒に行くようにしている。おふたりにその方の顔を覚えてもらい、シニア会に入るように勧誘をしてもらったりしている。私の地域は、区地域福祉保健計画地区別計画の支援チームにケアプラザが入っていて、食事会にも来てくれるし、こちらから相談する前に地域に来て、どの人が心配か探してもらえる関係性ができているので、このようなケースで、もし、お父様が亡くなって自治会に入っていないなくても、ケアプラザには自治会から通報というか話がいくようになっている。自治会に入っている場合は、お香典を持っていくので、その時の様子で、民生委員にケアプラについてもらったりできる。気づきの点については、私の地域では出来ていると思う。

ご主人が亡くなられた時には、お母さんを見守る体制ができるように「このようなものがありますがどうですか」と話し、民生委員やシニアの会長につなげ、その後、近所の方も見守りの体制にはいれると思う。2ヶ月前に長女が作業所を休止した時、放っておきすぎたと思われる。

地域で亡くなられた人がいると、班長さんから伝わってくる場合もあるし、近所の立ち話から耳にはいつてくることもある。地域の中で情報が入るような仕組みを作っておかないと、亡くなられても隣の方も気がつかないというのが現状である。

(西尾分科会長) 地域の孤立化が進み家族でも見えにくくなっているが、西区のようにふれあい会や見守りの会の仕組みがあり、名簿に載らなくても周りが気にして把握されるような関係があると、地域でも気付いて支援につながっていける可能性が広がると

いう実践の話をいただいた。

(青木委員) 民生委員の立場だと、通常の見守り活動をしていく中、この事例のお宅は非常に見えにくい。80歳以上の方の大半は、皆さんに迷惑を掛けたくないで自分達で一生懸命やり、自分達から発信する世代ではない。60、70代は、福祉を理解しているが、80以上の方は、自分で処置するという意識が非常に強いため、なかなか気付きにくい点がある。また、米岡委員が言われた「お葬式は殆どが家族葬」、またお亡くなりになるのが特養や病院に入られていて家族葬なので、いつ亡くなられたのかもわからない。その状況で、民生委員としては、二つの障害、高齢を見守るとしても、もう少し行政側(区役所やケアプラザ)が80歳以上の方には定期的に連絡をいれるとか、訪問する等して、ケアプラザから、民生委員やシニアクラブ等に何らかの形で情報をいただければ良いと思う。

また、民生委員の見守り活動をしていて思うのは、横浜市では、“ごみ屋敷”についても福祉という観点で問題があると動いている状況の中、高齢で動けない方は、ごみを出せないため非常にごみの量が少ないという状況が見られるので、現在の資源回収のあり方、特定の家庭の回収方法等、行政側から変えていく必要があると感じている。もうひとつ、ここでは賃貸住宅生活20年とあるが、そのような方達は地域との係わりを殆ど持たない方が多い。そのような方達については、大家さんや管理している人が行政側に「こんな人がいます」という報告をする形をとっておかないと、地域では住んでいる世帯や人が変わってもわかりづらいという問題がある。その地域に密着していない生活感を持っていない方達の見守りについては、もう少し行政側からの情報が欲しい。このエコマップに長女が◎になっているが、お母さんも◎になる仕組みが必要だと感じる。

(西尾分科会長) 1事例目の検討について、そろそろ時間となりますが、田高委員、何かあるか。

(田高委員) エコマップについて、若干気になったのは、母親の状況と長女の状況が繋がっておらず、全体的に捉えられえていないように思えるところである。例えば、母親が脳血管障害を発症した時、或いは、娘の精神疾患と生活習慣病が悪化した時、母親の状態像は娘に、娘の状態像は母親に相互に関連するものであるもので、ばらばらでこの世帯は考えられないと思う。母親も長女においても深刻化することは、目に見えている状況であるので、深刻化する前にそれぞれの関係機関同士がつながり、地域も含めて、相互に“見える化”するための機会や場づくりが分野を超えた形で作っていきけるとよい。母親の病院や娘の作業所は、自発的にそのような動きは取りにくいのかもしれないので、そこは何か地域で“見える化”する仕組み、何らの解決の方策、緩和のための方策を話し合える場を作る事が必要だと思う。

(西尾分科会長) いろいろな角度からご指摘・ご意見をいただきホワイトボードに書いていただいた。ポイントとなりそうな部分はどこか。

(事務局) 今、いただいた意見でポイントになりそうなところは、そもそもこの事例は、非常に周りから見えにくいケースで、80代ということで、自分から困りごとを発信す

ることも考えられるが、自分で頑張ろうとして抱え込んでしまった事例である。救急車や葬儀等、いろいろな気づきのきっかけがあったはずだが、家族葬でわからなかったりした。今回敢えて事例では記載していないが、田高委員からいただいたご意見である、関係機関同士のつながりがあれば、地域と一緒に考えられたのかもしれない。また、そもそも本人と子ども、二人ともが困難になる状況の前に把握して支援しておくことが必要だったかもしれない。また、山田委員の言われた日々の生活の中の変化から近所の人が気づき、その情報から行政やケアプラザにつなげられたかもしれないし、逆に「行政側からの情報があれば動けたかも」というご意見もいただいた。「どこかが気付けば」というよりは、いろいろなきっかけで気付くタイミングがあった事例。ただ、自助ももちろん持ち上げなくてはいけない。特に 80 代は、自らなんとか課題を解決しようとする世代であるというご意見もあり、ただ「相談しに行きましょう」でなく違うアプローチを考えなくてはならないと感じた。

(西尾分科会長) ありがとうございます。今、整理していただいたように「自助」に関しては、自分から援助を求める力がない世代であることが課題、「共助」では、仕組みとしてはあるがなかなか見えにくい、つながっていないところをご指摘いただいた。「公助」では、いろいろな制度やサービスに係わっているのだが、相互の連携のないこと。それぞれに自助と共助と公助の間に隙間がかなりあいているところをどのように埋めていくのかという課題が出てきたのかと思われる。

(オブザーバー) (旭区生活支援課) 最後の田高委員からのお話がとても印象深く、実は、生活支援課がそのような様々なセンター機能の支援をしている。逆に言えば、そのようなセンター機能がないということで、障害関係は長女に、お母さんは病院関係に係わっている。誰かまとめて全部の司令塔になる部署が絶対必要なのだが、それをいったいどこがどうやって担うのが一番の課題である。我々が管理しているので、我々がNPOや病院、社会福祉法人まで全部つなげて端から相談していけばよいのだが、そういった場を作って話を回すことがとても有意義である。

(西尾分科会長) 生活支援課は、そのためのご苦労がある。ケアマネジャーのような責任を持った狭間の事例を担当するだけに難しさがあるのではないかと感じた。

よろしければ、次の事例に進みたい。

【事例2】「堆積物であふれた家に一人暮らしする高齢者」

・事務局より事例紹介（説明省略）

(ゲストスピーカー) (健康福祉局福祉保健課) 話の参考に、今回ご紹介した事例は70代男性単身の方だが、本市全体でいわゆる「ごみ屋敷」として把握している人のうち、30代、40代、50代の方が約45%、60代、70代、80代の方が約50%となっており、必ずしも高齢者特有の問題ではないこと。また、今回ご紹介したのは単身の方だが、いわゆる「ごみ屋敷」に単身者がしめる割合は全体の約60%、残り約40%は、複数世帯である。その中には、先の事例のような高齢者と介護している方との組み合わせもあるし、比較的若い年齢でお子さんを育てている方、保育園や小学校に通っている年齢のお子さんがある世帯も実際にはある。そういったいろいろな状況があることを

意見交換の中で扱っていただきたいと思う。

(西尾分科会長) 何件くらいあるのか。

(ゲストスピーカー) (健康福祉局福祉保健課) 本市では、近隣に影響があるいわゆるごみ屋敷として把握しているのは 67 件である。

(西尾分科会長) 若い世代の方もいらっしゃる。その中で一つの事例だが、作っていただいた部分もあるのかもしれないが、先程の「困りごとを抱えている」というところというと、周りは気付いて困っているが本人はあまり困っていないというところをどのような知見に入れていったらよいのかで事例に挙げさせていただいている。

(下嶋委員) ひとつは、終活など「人間はいつか死ぬんだ」という話。例えば大病をして入院すると「自分は、九死に一生を得たから新しい人生を歩もう」と考える。こういうようなターニングポイントがないと、これはいつか利用できると考え堆積物が増えてくる。この 70 代の男性は、最初は悪いという気持ちはあるが、決定的な病気、癌等の大病をされているわけではないようで、自分は未来永劫この地球上に生きると考えているとすると、なかなか片付けられない。だから、30 代 40 代の若い方も含めて、人間は、いつあの世に行くかわからないことを前提として身辺整理をする。普通に話してもわからないので、例えば、本人の困りごとで「堆積物がなくなると家の中が見えてしまう」と考えるのではなく、70 代、男性、独居だと見えて万一の場合に誰かに気付いてもらった方が、家の中で倒れた時に助かる確立が高いという助言。困りごとでなくむしろ、「綺麗にすれば助かる率が高くなりますよ」とか「綺麗にすれば、そこでガーデニング等できますよ。場合によってはトマト等、庭でできますよ」等、メリットについて一生懸命、近所の人が話す等、まずは考え方を変えてもらう。近所の人が処分援助する。一端綺麗にして、考え方が変われば、その方は預貯金もあり年金もあり、日中何もすることがないのなら、畑等作ったらどうか、と助言する。

(内海委員) この方は、家電等の修理が得意で、20 年前、定年の前の 50 代で越してきた。先程のケースもそうだが、どのような町なのかにもよる。もうひとつ、家電等の修理、要するに張り合いのある生活が何かということ。やはり、興味関心があることで何か人から頼りにされる、社会の中で認められることが工場を辞めた後、上手く組み立てられてなかった。それが一番大きいかなと思う。逆に家電の修理が上手なことが上手くプラスに考えられたら、人から石を投げられるようなことにはならなかつただろう。高齢者の生活支援の分野でも、そのような技術はかなり高度な部類になる。家具の転倒防止の取り付け作業など、大工仕事や工作が好きな人は、男性に多くいる。そのようなことをする仲間ができたなら、まったく違った展開になつただろうと思う。定年を機に社会関係が一気に無くなってしまい、地域との顔の見える関係がないから、自分からアクションがおきなかつたのだろう。地域の人から「変わった人」と見られてしまっているのではなかなか上手く地域デビューができていない典型的な例である。区に相談で来るのはこのようなケースが多い。自転車修理が得意だと分かっているも、そこで地域の役に立つ取組にはなかなかつながつていない。地域の人から「これをお願いします」という声があつたら大分違つたかもしれない。あるいは、このよう

なノウハウを持っていると自分から発信できる人ではなかったこともマイナスに働いてしまった例ではないか。

(西尾分科会長)「私はこのようなことができます」と地域の人材情報を登録するような機関があればよい、現在は、シルバー人材センターがそのような役割をしている。

(下嶋委員) 内海先生がおっしゃった話、その通りだと思います。ただ、ひとつ気を付けなくてはいけないのは、車や家電製品等、IT 技術は進歩が著しい。例えば、昔は日曜ドライバー等あまり車を使用しない人はバッテリーがあがると充電を心配してターミナルを一時外すこともしたが、今はバッテリーのターミナルを外してしまうとコンピューターが狂ってしまい外してはいけない。というように、昔の技術が生きていればよいが、これだけ IT が日進月歩で進むと生きていない可能性もある。どうしたらよいかというと、この方は、過去の栄光に捕らわれず 1 からもう一度勉強直してそれを地域にフィードバックするという姿勢でないと、なかなか 70 代の男性がフィードバックするのは簡単ではない。それで、挫折して酒を飲んでダメになる可能性もある。

(内海委員) しかし、10 年前はまだ 60 代で、関心があることを学ぶ機会も場合によればセットできるかもしれない。地域デビューするきっかけがどうしたら作れるかをここで話をしたい。それで地域の中に居場所ができると、おそらく周囲の人との関係の中でごみ屋敷化しない選択もあり得たという感じがする。

(坂田委員) ボランティア活動と参加の仕掛けがあるとよい。

(内海委員) 前回の話の続きで、ある区就労支援の話だが、コミュニケーションが上手くとれないとか、地域の中で居場所がない、自分の役割が見つけられないという人がとても多く、遠くにいったって働くことやボランティアをしようという意識はない方が多い。生活困窮の人はできるだけ交通費は使わず近場で探す傾向がある。その社会参加の機会を上手く提供することで、感謝されたり「すごい」と言われたりするだけで違ってくるのではないか。そのうち自発性が出てきて、「やはり、働かなくてはならない」と心を耕す部分が非常に大切だと思う。たとえ就労までいったにしても、本当に一部しか行っていないが、行っても数ヶ月で辞めてしまう人も多い。

(西尾分科会長) 就労は、賃金のための就労でなくてよいわけで、つまり社会参加という発想でよいのだろう。ボランティアというとまた少し抵抗があるのかもしれない。そのような機会を地域の中にどのように作るかである。

(内海委員) 中には、単なるボランティア、例えば、スポーツセンターで無料のラジオ体操に参加をしてもらい、何回か参加をしているうちに一緒に参加している人と話ができるようになるなど、そんなに大きいことでなくてよい。社会参加のバリエーションもたくさんあるので、先程、下嶋委員が言われた農作業は癒しの効果もあり成果も数ヶ月で収穫できるなど分かりやすく、見える成果を繰り返すことで、少しずつ心を耕すことができると思う。

(山田委員) 子育て支援拠点では、「おもちゃの修理」をお願いしている。おじさまが自分で道具を買って揃えて毎回重い鞆抱えて 4～5 人で来てくださり「僕はパーツをつな

ぐのが得意です」「私は木製のおもちゃが得意です」等、お母さん達にも説明をしてくれるので、楽しそうだと思って見ている。これを読んだ時に唯一希望に思えたのは、ご本人が何か張り合いがある活動をしたいということが素晴らしい。ご近所の人も変わった人だと思ひ距離を置いている方なのだと思うと、ご本人の希望を誰かが尊重してそのような活動につなげてくれれば良かったのにと思っていた。例えば、地区社協の中で困りごとがあると、「〇〇さん、ちょっと電球変えてあげてよ」等、地区社協単位で誰かがコーディネート出来る人や、ボランティアセンターまでいかなくてもまず頼りになる人がいてくれたら良いと思っている。

(内海委員) ご本人も近隣住民から嫌われていると自覚しているということなので、町内会の人か社協の人、区役所が行って、小さなことから接点を持つようにすれば、地域や近隣との関わりが生まれ、最終的にごみ屋敷が綺麗になることもあるのではないかな。

(青木委員) サラリーマンで同僚としかおつきあいをしていない人が多くいるし、仕事が終わってこのようになるのも分かるような気がする。ごみをためるのは別として自分が何をしてよいのか分からないという気持ちはわかる。

(下嶋委員) その人の得意の分野、私の場合は、ウォーキングでは満足できないので歴史を訪ねてのウォーキングです。仲間と一緒に70代の方に声かけをして何人かで触れ合って交流をすれば、「じゃあ、ちょっと家に来て…」等となり、結果として自分から片付けようという気になると思う。ただ、ごみ屋敷を綺麗にすることだけをターゲットにしないで、この方は、「日中何もすることがないので張り合いのある生活」ということにポイントを絞り込む。好きな事、例えば料理が好きなら周りの人も喜ぶのでサークルでもいいし何か張り合いのあることをまずやってもらい、近隣との交流ができて、「このままのごみ屋敷ではまずい」という気持ちが出てくれば良い。

(米岡委員) 少しずれて申し訳ないが、先程、データを聞いて怖いと思ったのは、30代の方でごみ屋敷となると先が長いこと、もっと気になったのは、子育て世代でのごみ屋敷は、お子さんに連鎖するのではないかということ。ごみ屋敷とは単に片付けられないということではなく、単に家の中が散らかっているのではなく、他の要素があるからごみをため込んでしまう。それが、子育て世代の方だということは問題が大きいと思う。お子さんがそのような環境で育ってしまうとそれが普通になってしまう。70歳の方も大事だが、子育て世代の方の部分もなんとかしないと大変な事になると今、非常に感じている。

(山田委員) うちの法人で産前産後ヘルプや生活支援をやっている。産後のヘルプで家庭に入ると「お片付けどこからしましょう」という家庭もある。ちゃんとお仕事もされているお母さんで育休中、家の状態は大変。お母さんには精神疾患等、事情がある方も多く、そのようなところを紐解きコーディネートして支援に入らないと難しいケースが多い。

(西尾分科会長) そこは、ごみが片付いたからといって問題の解決にはつながらないということか。

(山田委員) その通りである。お母様が抱えているものをケースワーカーさんにつないで一緒に考えていかないと根本的には解決しない。

(内海委員) その人にとってはごみでないのかもしれない。

(西尾分科会長) 今の子育ての生活支援ヘルパーの場合は、直接依頼がくるのか公的なところから依頼が入って派遣されるのか。

(山田委員) 2種類あり、公的な産後支援ヘルプから入る場合と、法人が「このような生活支援をやっています」とPRし、個人的にお願いされる場合もある。

(下嶋委員) 先程の例に出された70歳代の男性と違い、子育ての時期という一過性のものなので、その時期がすぎれば整理整頓ができる。要するに仕事が忙しくてそこまで手が回らない。朝、忙しくてごみを簡単に出せないという条件がクリアされれば30代、40代の方はごみ屋敷化するのは一時的な問題で、家族が抱える問題が解決されればごみ屋敷にはならないかもしれない。ただ、70代の男性の場合は、人生そのものなので、そのまま待っていても好転する状況にないので事務局が事例に出されたのかもしれない。

(事務局) 20年前にこの70歳代の男性が地域に来た時、「不思議な人」と思われたとあるが、最初から地域とつながっていればこのようにはなかったのかもしれない。

(西尾分科会長) 50歳代で仕事もされていて、わからないが背景には家族のこともあったのかもしれない。家族を失って孤独な状態で違う地域に来たのかもしれない。その時に地域で何ができるか聞いてみたい。

(米岡委員) 地域で考えると、これから先、単身世帯が多くなる状況なのでワンルームが多くなる。その方は、自治会等、頭にはないわけで、自治会は入りたい人が入るのではなく、その地域で暮らすためのルールだという考えを変えるべきである。

私達は、今、一人暮らしの方で自治会に入られている方は殆ど把握している。災害時の要援護者名簿もあるが、恐らく、要援護者の名簿の中には、自治会に入っていない方の名前が大変多いと予想され、自治会に入らない方の名簿をもらっても手に負えないと考えている。まずは、自分達で把握している方を優先的にと思っている。この先6割近くが単身になると聞いているが、そうも言うっておられず、地域に暮らすというのは「ごみ出し」「私道整備」等、地域のルールがあるわけで、自治会に入るのはそこで暮らしていくための家賃のようなものと考えてもらえると良い。

自分のところだけでも「ごみ集積所を使う等あるので、満額とは言わなくても自治会費いただきます。」とお願いしている。自治会費という名前そのものも問題があるかと思うが、そのように考えていかないと、この先、ワンルームの方の人数が多くなるとますます地域とのつながりがなくなる。世帯でも表札が出ていない家庭も多くあり、番号で生きている方が多い。災害があった時、自治会で面倒見なさいといわれても、それは無理だと思っている。

(内海委員) 米岡さんのお住まいのあたりはワンルームが非常に増えている。私関わっている東久保も同様である。

(米岡委員) 前に戻って申し訳ないが、ここに「大家」と書いてあるが、今の大家さんは、

家を建てる時には自治会にお願いに来るので、「ごみはこのごみ置き場に置いてくださいね」と約束するのだが、建つと売ってしまい買った人は「知らない」という。不動産屋に言っても、それは家賃に響くので持ち主に言ってくれないので、無法地帯になってしまう。その辺をどうにかしていただかないと、ましてや地域振興補助金を自治会の人だけしか払わないとなると、これからは自治会に入らない人の方が多くなった時、その方を要援護者として面倒見るのに活動費は払わないというのはおかしいと思う。

(青木委員) 難しい。幼稚園や小中学校の子どもがいると地域とかかわらないといけませんが、それを過ぎてしまうと「自治会が何をしてくれるの」と公共の場でいらっしゃるが、公務員住宅は、殆ど入らない。自分の地域だと思っていない。所帯を持って子どもがいると、子ども会や自治会に関係を持ってくれる。今、米岡委員がおっしゃったことは、どこでも起こっている。

横浜市は、ごみの分別がかなり進んでいるが、単身者は殆どわからない状態で、出すと近所の方に怒られてしまい、しかたないから自分の家のためにごみ屋敷になる。しかたないから他のところに持っていくのは、単身者で今、日本を動かしている人達が圧倒的に多いと思う。その方達は、友達同士の付き合いがないから、人の家に行ったことがなく、自分の家のごみで溢れていても、それが自分の家だと思っていてごみだと思っていない。それがたまたま溢れてしまっただけで「ごみ屋敷」という形でその方で精神状態に達して福祉の観点から何とかしようとなる。

(西尾分科会長) そのようなごみ屋敷も、もしかしたらあるかもしれない。自治会の話が出たので、アパートやマンションで単身の方の自治会加入率が下がってしまうというところで、地域とのつながりが欠けてしまうことに何か良い工夫や手立てはないか。よく自治会費が世帯単位なのがネックだと言われたりするがその辺はどうか。一人だと多少安くなるとよいのではとも言われている。

(下嶋委員) お金もそうだが、当番が回って来る方が負担になるようで、高齢になるとそこがクリアできない。自分が当番になるとかえって迷惑をかけてしまう。

(内海委員) 実際には当番をとばすが、高齢化が進むと、今年もとばし、来年もとばしと高齢者ばかりになってしまう。

(下嶋委員) 今の横浜市の370万都市の中で、加入率が落ちている。それをこの委員会でやるには、少し時間が足りないと思う。例えば税金対策で、更地で置いておくと固定資産税が高いので、アパート等にして税金対策をするのが一般的なやり方で、そうすると不在大家が多くなる傾向がある。それを踏まえて、他の事由で自治会の加入率が下がっている事を併せて活性化するにはどうするか等、自治会の活性化を前提にすると時間が足りない気がする。

(米岡委員) 活性化というより、自治会に入っていないと、地域の人が気付くのが遅れて目こぼしになってしまう。亡くなれば自治会の役員がお香典を持って行くが、自治会に入っていないければ一切そのようなこともない。本当に社会から消えてしまった存在になる。そのような意味で、自治会を活性化するためとかではなく、個人情報保護法

等もあるが、地域に住んでいる人が命を守ることとして地域につながることは大事だ
と思う。

自治会が単にお祭りに出たいから加入するということではないことをこの先考えてい
かないと、近々どうにもならない世の中になると思う。

(下嶋委員) 単身者は、昼間はないし夜はこんな話をしにくるわけないし、全市的にプ
ロパガンダでこのような状況ですとやらないとなかなか説得するのが難しい。自治会
に入らなくても選挙公報はちゃんと来るし掲示板もあり不便はないのかもしれない。

(西尾分科会長) 自治会については、計画の中でも重要な地域の基礎的な単位として大事
にしていきたいと思いますという方向性があるので、地域に生きる者としての権利義務の基
盤であるという認識を共有できるようになるとよい。

(田高委員) この方は50歳代の時にこの地域に転入されてきている。「たれば」の話に
なってしまうが、そこで一声かけることができる地域だったら、或いは本人自身が声
をかけることが出来ていたら20年の歳月も違っていただのではと思う。NHKでAIが
「40歳代の一人暮らしが国家を滅ぼす」と分析したということだが、高齢期に至る前
に「健康づくり」、「関係づくり」、「地域づくり」を一体的にしていくことが重要だ
と思う。その結果として本人の社会的孤立の予防に必要な価値観や考え方を地域に学ん
だり、担い手にもなっていけるのではないかと。定年前になかなかそのきっかけがない
と難しいが、40代以上は、生活習慣病予防や介護予防等の将来に渡る健康づくりの動
機付けには非常に重要な時期なので、その時期に健康づくりとともに関係づくりや地
域づくりといったような地域への志向性も加味することができればよい。

もうひとつは、20年前、引っ越されてきた時に近所の方が警戒してしまったのは致
し方ないかという気がしないでもないが、ただ、その後、住民同士で気になる住民の
ことを話し合う機会があったかどうか気がなる。気になる住民のことを話し合える
機会や場があれば事態は変わっていたかと思う。そのようなことを気軽に相談したり
話し合える機会を作れば、その問題がすぐに解決されなくても良い方向に向く可能
性はある。例えば、コンビニの定員でもよいと思う。ゲートキーパーというか、立場
や役割に応じた地域の気付きがあってよいと思う。そのような気付きを持ち寄る仕組
みや体制が地域にあれば、そういった所に一言連絡、一言相談するという機会や場
につながるのではないかと。

(西尾分科会長) 重要なのは、地域にいらした時の挨拶の関係、声かけをするような関係
がなかったということ。キーワードとして「健康づくり」は重要。「この地域では必
ずこの健康づくりの教室に来てください」というようなことは難しいにしても地域
の中で気兼ねな居場所のような場が出来ると、随分違ってくるとも感じるがいかがで
しょうか。

(内海委員) 事例2は、どちらかというところから見られたりしているのは、戸建て住宅
街ということ。事例1は、私のイメージでは、アパートで誰も何も気にしないという
もの。事例1と2はまったく違う町。その意味では、事例2は、近所との係わりを持
つのは、おせっかいおじさん、お婆さん、あるいは自治会の役員が勧誘をするなどで、

そんなことで場合によると上手くいったかもしれない。事例1は、そうは思わない。病院や作業所など、関わるべきところの動きがまったくなくなっていないという感じがすぐくする。このふたつは、町のイメージが全然違う。

(西尾分科会長) 地域性等、色々見えてくる。ごみ屋敷が問題として、周囲から通報があって、行政としてもむしろ強制的な、例えば「北風と太陽」となっている。もしかしたら「北風」を使うかもしれないが福祉的には「太陽」でつながりを活かしていく支援もしていくと何うが、地域の中でいろいろなグループに参加をされる等、そのような支援につながっているという例はあるか。

(ゲストスピーカー) (健康福祉局福祉保健課) 実際に堆積したものを片付ける時に、自治会町内会の方に協力いただいて、ご本人とご家族が出てきて片付ける事例もあるようだ。その時には、地域の方が片付けをお手伝いするのは、その後の支援には響かないが、地域の方が一緒にやってくれるということがその方にとって関わりをもつということで重要だと感じている。地域の方が入った支援がその後、どうなったかと地域の支援が入らなかった後どうなったかは、まだまだこれから事例を積み重ねた後検証していきたいと思っている。

(オブザーバー) (西区福祉保健課) ごみ屋敷の事例は地区にたくさんある。マンションの例も一軒家も例もある。中には、逆に地域のボランティアをされているような方でもごみ屋敷になってしまい高齢になって身体が動かなくなり、ボランティアのために物をたくさん集め過ぎた方もいる。逆に、なかなか会えない方もいるが、普通に話ができる方でもごみはたまっていく状況である。そのことを解決しようとしても難しく時間をかけていかないといけないのが実情。

先程、活動費からお金をという話や、NHKの40歳の一人暮らしのA Iの話もあったが、一坪千円の家賃補助をすれば、そういった貧困が少なくなってくるというデータがあるので、日本全国で考えなくてはいけないのかもしれないが、今までと同じように助成をするのではなく何か私達の見方を新しく変え、これからの地域福祉の考え方を変えていくことにより、もうひとつ新たな暮らし、或いは孤立を防ぐという転換期に来ているのかもしれない。

(西尾分科会長) そのような意味では、支える側と支えられる側という意識、見方の概念を少し変えて行かなくてはいけないのかもしれない。少し事務局でまとめてもらうとどうなるか。

(事務局) 自治会に加入していたら把握できていたのではないかと、また、誰か、いわゆるお節介おばさん・おじさんが声をかけられたのではないかとというご意見もいただいた。国が言っている「1億総活躍社会」の考え方では、皆さんが自分の持てる力を発揮して地域の中で貢献をしていく。そして、支えられる側も支える側も一緒になってやっていくとなっている。今日いただいたご意見は、まさしくその話と合致すると思う。生き甲斐等の機会をつくる。ただ、そのためには、コーディネートする人がいないと難しい。そこは事務局の中でも意見交換で出ていて、「人材が大事」というところにつながる。

また、ごみを片付けるというのが目的ではなく、その裏にある課題や何かしら、困りごとをしっかりと見ながらやっていかないといけない。時間をかけて支援をしていくという意味では、地域の方も、関係機関につなげたらそこで終わりということではなく、一緒に考えていくといったところが大事だと感じた。また、公助として、行政、ケアプラ、地域の職員が地域と一緒にその方に寄り添ってやっていくことが大事だということが今回わかった。

健康づくりについては、40代の方にも関係があることで、ウォーキングポイントは若い方もたくさんやっていらっしゃるように、健康という視点も個別支援策を踏まえた地域支援のところでも非常に重要な視点だと改めて認識できた。

(西尾分科会長) それでは、十分ではないにしても、ふたつの事例を通して、なかなか見えにくい困りごとの部分を浮かび上がらせてどのように見守っていくのかかなり議論が出来たのではないかと思います。整理は、これから記録もあるので適宜まとめていただくとして、課題としては、自助の声を上げる力をどう高めていけばよいのか、サービスにつなげる時のコーディネート役割、共助の中では、地域の中で把握して見守る仕組みがあるけれども、その連帯をどのようにつなげていくか、とりわけ公的なサービスや支援の中では、対象者が限定されている面もあるし、それぞれがばらばらに支援をしているので、支援機関の相互の連携つながりが十分でないというのが課題に挙げた。

ごみ屋敷の事例では、十分、支えるために気付くチャンスもあったが、どのように地域の中で気付きを生み出していくか、その中でとりわけ自治会が重要な役割を果たしていくと思うが、加入率の問題等もあり課題がある。

皆さんが日頃感じていただいていることを出していただいたが、これをベースに3回目に向けて事務局で整理をしていただく。3の事例についてはこのようなところでよいか。

(一同) 了解

3 第3回分科会2に向けて

(事務局) ありがとうございます。本日、なかなか把握が難しい事例を挙げさせていただいたが、次回、3回目は、分科会2の最終回になる。1回目と本日の2回目いただいた御意見を中心に、従来の取組では気付くことが困難な地域で困りごとを抱えている人に気付いて支えるための具体的な方法を自助・共助・公助で整理して、また補足する視点を入れてまとめていく作業をしていきたい。

こういったものを基に第4期計画の素案策定に生かしていきたいので引き続きご協力いただきたい。よろしくお願い致します。

(西尾分科会長) ありがとうございます。その他、皆さんの方でお気づきの点、ご報告などあるか。

(一同) 特になし

4 閉会

(事務局) 本日、皆様からいただいたご意見の中で、特に印象的だったのは、「気付く」と

	<p>いうところで、誰が気付くのか、住民だけでなく、地域の中にいろいろな方がいるので、皆が気付くような、少なくとも隣の方は気にするというようなそんな社会を作っていきたいと思った。以上をもちまして、本日の会議を閉会とさせていただきます。</p> <p>次回 第3回 9月26日(火) 13時30分～15時30分 健康福祉総合センター903 閉会</p>
<p>資 料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○平成 29 年度第 2 回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会 2 次第 ○第 4 期横浜市地域福祉保健計画と成年後見制度利用促進計画の一体的策定にかかる分科会の設置について <資料 1 > ○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会 1・2 進捗報告について <資料 2-1 > ○分科会 1 「多様な主体の参加と連携による支えあいの地域づくり」検討シート <資料 2-2 > ○分科会 2 「地域で困りごとを抱えている人」意見交換シート <資料 2-3 > ○事例 1 障害の娘と高齢の親の事例 <資料 3-1 > ○事例 2 堆積物であふれた家に一人暮らしする高齢者 <資料 3-2 >